

援助者の負債感が自殺予防の判断に与える影響について

太 田 仁*

The effect of helpers' indebtedness on suicide prevention decisions

Jin OTA

要 旨

本研究は、民生児童委員 4217 名を対象として自殺に傾く人の理解と援助に与える要因を明らかにし、自殺予防における適合的援助に寄与することを目的に実施された。

具体的には、民生児童委員自身の一般的信頼感（以後 信頼感）、被援助負債感（以後 負債感）、援助要請態度が自殺予防援助に関する評価に及ぼす影響を検討することを目的とし以下の3つの仮説検証を試みた。

仮説1. 援助要請態度の肯定・否定に関係なく負債感は生じるであろう。仮説2. 信頼感の高い個人は、他者の情報を取得しやすいことから自殺予防援助に妥当な評価をすることが予測される。仮説3. 否定的援助要請態度を伴う負債感は、他者に対して忌避的回避的であるため情報が不十分で妥当性を欠く評価をすることが予測される。回答に不備のなかった1174名を分析対象とした結果は、すべての仮説を支持するものであった。今後の課題として、肯定的援助要請態度と連動する負債感は、信頼感を高めることについて相関分析では間接的に示唆されたが、自殺予防援助についての妥当な評価への影響過程については明らかにすることができなかった。その理由として、援助態度の測定が構造的に行われなかったことが考えられる。今後は、援助要請態度の多面性を考慮し、負債感を媒介した被援助者への影響過程モデルを想定した検討する必要がある。

キーワード：自殺予防、ゲートキーパー、援助要請態度、負債感、自殺予防援助評価

I 問 題

日本の自殺者数は、平成10年（1998年）に前年比で約35%増加して3万人を超え、その後14年連続で3万人を超え03年には最多の3万4427人になった。その後、社会的状況の好転や官民一体の取り組みもあり、平成12（2000）年に3万人を下回り、それ以降は10年連続で前年より減少している。2019年の日本の自殺者数は、20,169人となり減少傾向にある（自殺対策白書 令和元年版、内閣府（2020）¹⁾）。しかし、「自殺未遂者は自殺既遂者の10倍存在する」（本橋, 2007）²⁾ といった指摘や「自殺既遂者と強い絆のあった人で深い心の傷を負う人は、自殺1件あ

たりに最低でも6人はいると推定され、自殺は自殺者だけの問題にとどまらない。

自殺の原因は1つではなく、多数の要因が複雑に絡み合っている。さらに、自殺者の家族や友人など周囲の人からの聞き取りによる心理学的剖検（psychological autopsy）調査などにより蓄積された成果から女性は自傷行為や死亡1ヶ月間に死に関する発言が男性と比較して有意に多く、男性と比較し他者に相談援助を求めているのに対し、男性は、死亡1年前に遡ってみても女性と比較して他者に相談援助を求めないことが判っている。男性の自殺者数は、女性の自殺者数の2倍以上である（2019年度は、女性6,091人に対して男性14,078人）ことから、3分の2以上の自殺者が援助を求めずに既遂にいたっていると推測され、援助者による自殺に傾く人のサインを察知する能力が求められている（厚生労働省、2020）¹⁾。自殺総合対策大綱（内閣府、2017）³⁾では、自殺予防及び関連行動について1) 個人の問題解決に取り組む相談支援を行う「対人支援のレベル」2) 問題を複合的に抱える人に対して包括的な支援を行うための関係機関等による実務連携などの「地域連携のレベル」3) 法律、大綱、計画等の枠組みの整備や修正に関わる「社会制度のレベル」の3つのレベルごとの理解と援助を効果的に連動させる必要を示している。1)の「対人支援レベル」は、身近な援助者における援助を指し、ゲートキーパーによる自殺に関する理解と援助が期待される。自殺総合対策大綱（前掲）では、自殺予防の重点施策の一つとしてゲートキーパー（＝ゲートキーパーとは、自殺の危険を示すサインに気づき、適切な対応ができる人を意味する）活動を挙げている。ゲートキーパーには地域や職場、教育、その他様々な分野において、身近な人の自殺のサインに気づき、その人の話を受け止め、必要に応じて専門相談機関につなぐなどの役割が期待されている。具体的には、広く市民から、地域のかかりつけの医師や保健師、精神保健福祉従事者、行政等の相談窓口職員、関係機関職員、民生児童委員や保健推進委員、ボランティアなど、さまざまな人たちがゲートキーパーの役割を担うことが期待されている。

個人が直面する事象についてどういった行動を選択するかについては、過去の経験の蓄積に大きく影響される。過去の経験が体制化され個人の行動に力動的影響過程を説明する変数に社会的態度（social attitudes; 以後 態度）がある。「態度とは、関連するすべての対象や状況に対する個人の反応に対して、直接的かつ力動的な影響を及ぼす経験にもとづいて組織化された精神のおよび神経の準備状態のことである。」（Allport, 1935）⁴⁾。具体的に態度は①構え（set）②行動への準備状態（readiness to act）③心理的基礎（psychological basis）④永続性（permanence）⑤学習された性質（learned nature）⑥評価的性質（evaluative nature）以上6つの要素により操作的に定義される。以上から個人の援助態度については、「組織化された過去の援助授受経験により援助授受に対して直接的かつ力動的に影響を及ぼす精神のおよび神経の準備状況である。」と定義できよう。援助態度には、援助・被援助・援助要請の3側面があり、援助態度は過去の3側面の経験が相互に各々の意思決定に影響を与えられとされる。

援助態度を含む対人態度の中核を成す概念に一般的信頼感がある。信頼は、「疑うべき明確な理由がない場合に相手を信じるかどうか」と定義される（Rotter, 1980a）⁵⁾。また、信頼感は個人の過去の経験に基づく社会的学習により形成される人格特性（Rotter, 1980a, 1980b）⁶⁾であり個人差がある。

地域の援助者でありゲートキーパーとして有用な人的資源と目される民生児童委員においても同様であり、他者に対する信頼感が強い人は低い人に比べ、他者に関する多様な情報を入手しており他者の評定に積極的に用いる傾向（菊地ら, 1997）⁷⁾が想定される。この知見から高信頼者は、低信頼者に比較して多様な情報をもとに他者の様態について妥当な評価ができることが予見される。

しかし、援助は被援助に感謝だけでなく負債感を生起させる（一言・新谷・松見, 2008）⁸⁾。他者の援助のおかげで助かったと認知することで互惠性／返報性（reciprocity）お返し（返済）の義務に関わる負債感情は生成する（Gouldner, 1960）⁹⁾。換言すれば感謝に随伴する負債感は、互惠性認知と返報性への動機づけとなり、一般的信頼感の形成にも寄与しているといえよう。

反面、負債感是对人行動に対する回避の動機づけとなることも指摘されている（Watkins et al., 2006）¹⁰⁾。Watkins et al. (2006)¹⁰⁾によると持続的で強い心理的負債感是对人的志向性を低下させ、社会的相互作用を減少させると考えられている。その結果、他者に対する情報量は少なくなるため他者理解や評価について妥当性を欠き、ステレオタイプな評価がなされることが予測される。

上記から負債感、被援助および援助要請経験により生成され、日常の対人態度に反映されることが予見される。すなわち、肯定的な被援助・援助要請経験により生成された負債感、他者への信頼感を高め、他者情報に対する接近性も高いことから妥当な対人認知が可能となるだろう。一方、否定的な援助授受経験により生成された負債感、他者に対する信頼感を低め、他者情報に対しても忌避的回避的であるために対人認知について妥当性を欠くと思われる。

援助行動は、顕在的・潜在的援助要請者の認知から生起することから個人の援助要請態度は負債感が他者信頼感に与える影響の分岐点となる。すなわち、被援助の成功経験により生成される負債感、肯定的援助要請態度形成し、被援助の失敗により生成された負債感、否定的援助態度を形成する要因となると考えられる。

以上から、負債感、援助要請態度及び、他者信頼感と有意な関連性を有するであろう（仮説1）。肯定的援助要請態度に伴う負債感、他者への信頼感を高め妥当な援助評価をすることが予測される（仮説2）。否定的援助要請態度に伴う負債感、援助者についての理解や援助行動について妥当性を欠く評価をすることが予測される（仮説3）。

本研究では、過去の被援助経験による援助要請態度に伴う負債感及び他者信頼感が自殺に傾く人の理解と援助の評価に与える影響について上記の3つの仮説を検討する。

II 方法

調査期間：2018年度11月～2019年2月三重県民生児童委員研修会（全研修会の講師を筆者が担当）

対象者属性：平成30年度（2018）三重県民生委員児童委員ブロック別研修会に出席した民生児童委員 4217名（2869名分を回収 回収率67.2% 2869回答中不備のなかった調査票1174回答を分析対象とした）。

調査場所：平成30年度（2018）三重県民生委員児童委員ブロック別研修会場（東員町、鈴鹿市、津市、松阪市、伊勢市、志摩市、名張市、御浜町の各会場にて実施）

調査方法：調査対象者（全員民生児童委員）を研修会場にて、研修開始前に回答を求めその場で回収

調査協力者の性別人数：男性405名女性774名合計1174名

年齢別分布：30代2名0.2%、40代17名1.5%、50代94名8.1%、60代588名50.4%、70代462名39.6%、80代4名0.3%

平均年齢：66.3歳 標準偏差6.4

質問紙の構成

- ・「ゲートキーパー」活動の認知に関する質問1項目「1. 知らなかった」「2. 聞いたことはあったがその内容まで知らなかった」「3. 知っていたが研修は受けたことがない」「4. ゲートキーパー研修を受けて活動に取り入れている」から1項目の選択を求めた。
- ・ゲートキーパー活動に関する評価を問う10項目の設問「ゲートキーパー養成研修用テキスト（第3版）」9. ゲートキーパー Q&A（内閣府委，平成25年（2013）¹¹⁾を基に作成（具体的項目内容についてはTable 1参照）各設問について「1 はい」「2 いいえ」の2値で回答を求めた。
- ・他者への信頼度を測定する項目：一般的信頼尺度6項目（小杉・山岸，1998）¹²⁾「ほとんどの人は信頼できる」「ほとんどの人は他人を信頼している」など6項目について「あてはまらない」～「あてはまる」の5件法
- ・心理的負債感尺度5項目（＝抜粋）（相川・吉森，1995）¹³⁾「私は人に何かをしてもらったら、その人にお返しをすべきだと思う」「わざわざ人が私を助けてくれた時には、その人に単なるお返し以上のことをしなければならぬと思う」など5項目について「あてはまらない」～「あてはまる」の5件法
- ・肯定的態度3項目・否定態度5項目からなる援助要請態度尺度10項目（太田・阿部，2011）¹⁴⁾肯定的態度＝「何か困ったときに、人に助けを求めるのは当然のことだ」「自分にとって人に助けを求めることは、ごく自然な行為である」など3項目について「あてはまらない」～「あてはまる」の5件法
- ・否定的態度＝「人に援助を求めることは、恥だ」「人に援助を求めても、自分が必要な援助をしてもらえない」など5項目について「あてはまらない」～「あてはまる」の5件法

III 結果

調査対象者のゲートキーパー活動に関する認知に関する回答

「知らなかった」711名 63.9%、聞いたことはあったがその内容まで知らなかった」262名 23.5%、知っていたが研修は受けたことがない」123名 11.1%、「ゲートキーパー研修を受けて活動に取り入れている」17名 1.5%「知っていたが研修は受けたことがない」123名 11.1%、「ゲートキーパー研修を受けて活動に取り入れている」17名 1.5%であった。

自殺予防行動に対する評価

自殺予防の援助態度について尋ねる項目として、「ゲートキーパーQ&A」(内閣府, 2013)より抜粋した10項目について、その正誤について「はい=1」「いいえ=2」の2項目で解答をも求めた(Table1参照)。『1.「死にたい」と言っている人は、実際には死なない』以外は正答率が誤答率を上回っていた。しかしながら、質問

Table 1. 自殺予防に関する質問に対する選択率

質問項目	選択	n	選択%
1 「死にたい」と言っている人は、実際には死なない	はい	552	53.8%
	いいえ	473	46.1%
2 自殺を考えている人は、「死にたい」と口に出してなくてもサインを出している	はい	965	91.8%
	いいえ	86	8.2%
3 うつ病さえ治せば自殺は防げる	はい	189	17.9%
	いいえ	867	82.1%
4 自殺について話をするとかえって自殺の危険性をたかめる	はい	377	37.0%
	いいえ	641	63.0%
5 自殺者は男性より女性の方が多い	はい	201	19.8%
	いいえ	814	80.2%
6 若者(15~39歳)の死因の1位は自殺である	はい	775	76.8%
	いいえ	233	23.1%
7 うつ病や自殺は、私の役割とは関係ない	はい	114	11.2%
	いいえ	908	88.8%
8 「死にたい」と口にする人には「頑張り」「命を粗末にするな」「逃げてはダメだ」「そのうちどうにかなるよ」などの声掛けをする	はい	255	24.4%
	いいえ	790	75.6%
9 死にたいと言っている人と出会ったら本人のプライバシーを尊重して自分一人に対応する	はい	80	7.6%
	いいえ	967	92.4%
10 自殺に対応できる専門機関や専門家はいない	はい	245	23.8%
	いいえ	784	76.2%

■ = 誤答

項目1、3、4、5、6、7、8、10は解答者中100人以上が誤答を選択していた。質問項目2、9についても誤答者は80人を超えていた。

各尺度記述統計

以後の分析に先立ち各尺度の記述統計並びに信頼性係数(= α 係数)を算出した(Table2参照)。

各尺度は、5件法により回答を求め、合計得点を代表値とした、信頼性係数については、肯定的

援助要請態度の α 係数項目数が3項目であることも影響して、.639と低かったが質問内容の整合性から以後の分析に用いた。

Table 2. 各尺度記述統計計量及び信頼性係数

	n	min	max	mean	SD	α 係数
他者信頼度	1029	6.00	30.00	21.69	4.44	.775
被援助負債感	1105	5.00	50.00	18.94	3.80	.756
肯定的援助要請態度	1096	3.00	15.00	10.37	2.19	.643
否定的援助要請態度	1064	5.00	25.00	12.71	3.67	.748

援助要請態度と他者信頼度・負債感との関連性

他者信頼度と負債感と援助要請態度との関連性を明らかにするため、相関係数を算出した(Table3参照)。

Table 3. 信頼感・負債感・援助要請肯定・否定の相関

	他者信頼度	被援助負債感	援助要請の肯定	援助要請の否定
他者信頼度	—	.198**	.168**	-.108**
被援助負債感		—	.144**	.169**
援助要請の肯定			—	-.119**

n=1032 P<.001**

その結果、負債感は肯定的援助要請態度・否定的援助要請態度の双方と正の有意な相関を示した。信頼感、援助要請態度および肯定的援助要請態度と正の相関、否定的援助要請態度と負の相関を示した。

他者への信頼感・負債感・援助要請態度による自殺予防援助の評価への影響

援助者個人の他者への信頼度、負債感、援助要請態度が他者への援助行動への評価に及ぼす影響を検討するため、ゲートキーパー活動に関する10項目の設問に対する正誤を従属変数とし、他者信頼度、負債感、肯定的援助要請態度、否定的援助要請態度を独立変数とするロジスティック回帰分析を行った。以下、各項目の分析結果を示す (Table 4 ~ 13 参照)。

設問1 (Table 4). 「死にたい」と言っている人は、実際には死なない」について自殺に関する俗説として流布している誤った見解であるが、負債感と否定的援助要請態度の強さが「はい」の誤答選択に有意な影響を与えていた。

設問2 (Table 5). 「自殺を考えている人は、「死にたい」と口に出してなくてもサインを出している」については、先述の通り正しい認識である。この設問の他者信頼度が正答選択に有意な影響過程を示した。

Table 4. 「死にたい」と言っている人は、実際には死なない

	偏回帰係数 β	有意確率	Exp (B)	EXP (B) の 95% 信頼区間	
				下限	上限
他者信頼度	-.002	.891	.998	.965	1.031
被援助負債感	-.045	.033	.956	.917	.996
援助要請の肯定	.025	.469	1.025	.958	1.097
援助要請の否定	-.110	.000	.896	.859	.935
定数	1.907	.003	6.733		

※1.はい 2.いいえ ; 正当=2

Table 5. 自殺を考えている人は、「死にたい」と口に出してなくてもサインを出している

	偏回帰係数 β	有意確率	Exp (B)	EXP (B) の 95% 信頼区間	
				下限	上限
他者信頼度	-.073	.025	.929	.872	.991
被援助負債感	-.065	.074	.937	.872	1.006
援助要請の肯定	.005	.939	1.005	.890	1.135
援助要請の否定	.039	.315	1.040	.964	1.122
定数	-.254	.807	.776		

※1.はい 2.いいえ ; 正当=1

設問3 (Table 6). 「うつ病さえ治せば自殺は防げる」については、正答は「2. いいえ」であるが、負債感、否定的援助要請態度が誤答選択に有意な影響を示した。

設問4 (Table 7). 「自殺について話をするとかえって自殺の危険性をたかめる」については、

Table 6. うつ病さえ治せば自殺は防げる

	偏回帰係数 β	有意確率	Exp (B)	EXP (B) の 95% 信頼区間	
				下限	上限
他者信頼度	.004	.858	1.004	.960	1.050
被援助負債感	-.069	.022	.933	.880	.990
援助要請の肯定	-.060	.206	.942	.858	1.034
援助要請の否定	-.117	.000	.889	.840	.941
定数	5.036	.000	153.881		

※1.はい 2.いいえ ; 正当=2

Table 7. 自殺について話をするとかえって自殺の危険性をたかめる

	偏回帰係数 β	有意確率	Exp (B)	EXP (B) の 95% 信頼区間	
				下限	上限
他者信頼度	.005	.775	1.005	.971	1.040
被援助負債感	-.051	.022	.950	.909	.993
援助要請の肯定	.031	.381	1.032	.962	1.107
援助要請の否定	-.074	.001	.928	.889	.969
定数	2.048	.002	7.756		

※1.はい 2.いいえ ; 正当=2

俗説であり、誤った認識であるが負債感、否定的援助要請態度が誤答選択に有意な影響を示した。

Table 8. 自殺者は男性より女性の方が多い

	偏回帰係数	有意確率	Exp(B)	EXP(B) の 95% 信頼区間	
	β			下限	上限
他者信頼度	-.004	.859	.996	.956	1.038
被援助負債感	-.041	.149	.960	.908	1.015
援助要請の肯定	.024	.584	1.025	.939	1.119
援助要請の否定	-.109	.000	.897	.849	.947
定数	3.485	.000	32.611		

※1.はい 2.いいえ ; 正当=2

Table 9. 若者（15～39歳）の死因の1位は自殺である

	偏回帰係数	有意確率	Exp(B)	EXP(B) の 95% 信頼区間	
	β			下限	上限
他者信頼度	-.059	.010	.943	.901	.986
被援助負債感	-.002	.938	.998	.949	1.050
援助要請の肯定	-.048	.249	.953	.878	1.034
援助要請の否定	.001	.956	1.001	.952	1.053
定数	4.39	.564	1.551		

※1.はい 2.いいえ ; 正当=1

設問 5 (Table8). 「自殺者は男性より女性の方が多い」については、誤った認識であるが否定的援助要請態度が誤答選択に有意な影響を示した。

設問 6 (Table9). 「若者（15～39歳）の死因の1位は自殺である」については、正しい現状認識であるが他者信頼度の強さが正答選択に有意な影響を示した。

Table 10. うつ病や自殺は、私の役割とは関係ない

	偏回帰係数	有意確率	Exp(B)	EXP(B) の 95% 信頼区間	
	β			下限	上限
他者信頼度	.138	.000	1.148	1.081	1.219
被援助負債感	-.082	.022	.922	.859	.988
援助要請の肯定	-.013	.815	.987	.882	1.103
援助要請の否定	-.110	.002	.896	.836	.960
定数	2.379	.018	10.799		

※1.はい 2.いいえ ; 正当=2

Table 11. 「死にたい」と口にする人には「「頑張り」「命を粗末にするな」「逃げてはダメだ」「そのうちどうにかなるよ」などの声掛けをする

	偏回帰係数	有意確率	Exp(B)	EXP(B) の 95% 信頼区間	
	β			下限	上限
他者信頼度	.017	.408	1.018	.977	1.060
被援助負債感	-.063	.015	.939	.893	.988
援助要請の肯定	-.071	.086	.931	.858	1.010
援助要請の否定	-.066	.007	.936	.891	.982
定数	3.652	.000	38.553		

※1.はい 2.いいえ ; 正当=2

設問 7 (Table10). 「うつ病や自殺は、私の役割とは関係ない」については、ゲートキーパーのみならず、民生児童委員の役割でもあることから誤った認識であるが負債感、否定的援助要請態度の強さは誤答選択に有意な影響を示し、一方、他者信頼度の強さは正答選択に有意な影響過程を示した。

設問 8 (Table11). 「「死にたい」と口にする人には「「頑張り」「命を粗末にするな」「逃げてはダメだ」「そのうちどうにかなるよ」などの声掛けをする」については、誤った認識であるが、負債感、否定的援助要請態度の強さは誤答選択に有意な影響を与えていた。

Table 12. 死にたいと言っている人と出会ったら本人のプライバシーを尊重して自分一人に対応する

	偏回帰係数	有意確率	Exp(B)	EXP(B) の 95% 信頼区間	
	β			下限	上限
他者信頼度	-0.007	0.819	0.993	0.933	1.056
被援助負債感	0.061	0.115	1.063	0.985	1.147
援助要請の肯定	-0.033	0.616	0.968	0.852	1.100
援助要請の否定	-0.175	0.000	0.840	0.774	0.911
定数	4.167	0.000	64.503		

※1.はい 2.いいえ ; 正当=2

Table 13. 自殺に対応できる専門機関や専門家はいない

	偏回帰係数	有意確率	Exp(B)	EXP(B) の 95% 信頼区間	
	β			下限	上限
他者信頼度	0.067	0.002	1.070	1.024	1.117
被援助負債感	-0.025	0.313	0.975	0.928	1.024
援助要請の肯定	0.041	0.311	1.042	0.962	1.128
援助要請の否定	-0.091	0.000	0.913	0.869	0.959
定数	0.948	0.196	2.580		

※1.はい 2.いいえ ; 正当=2

設問 9 (Table12). 「死にたいと言っている人と出会ったら本人のプライバシーを尊重して自分一人に対応する」については、自殺予防については専門家との連携が不可欠であることから誤った認識であるが否定的援助要請の態度の強さは誤答選択に有意な影響を与えていた。

設問 10 (Table13). 「自殺に対応できる専門機関や専門家はいない」について誤った認識であるが負債感、否定的援助要請の強さが誤答選択に有意な影響を与えていた。

IV 考察

調査協力者について

本調査における質問紙への回答者は、全員民生児童委員である。民生委員は、民生委員法に基づき、厚生労働大臣から委嘱された非常勤の無給の地方公務員である（任期は3年，再任可）。また、民生委員は児童福祉法に定める児童委員を兼ねることとされている。民生委員・児童委員は、自らも地域住民の一員として、それぞれが担当する区域において、住民の生活上のさまざまな相談に応じ、行政をはじめ適切な支援やサービスへの「つなぎ役」としての重要な役割を果たしている（全国民生児童委員連合会¹⁵⁾）。

本調査は、民生児童委員の地区別研修会場にて、研修前に実施されている。各個人は、民生児童委員として参加していることから、回答時においても地域の援助者としての役割が活性化されていることが予測される。以上から、本調査結果における回答は、援助者の他者信頼感、心理的負債感、援助要請態度が援助行動に及ぼす影響過程を示唆するものといえよう。

調査協力者の自殺予防に関する理解

本調査対象者のゲートキーパーに関する認知に関する質問への回答結果から「知らなかった」と「聞いたことはあったがその内容まで知らなかった」、「知っていたが研修は受けたことがない」回答の合計は98.5%であった。この結果から、ゲートキーパーに関する知識や経験については低く、調査対象者間の差がないと理解できる。

ゲートキーパー活動に関する10項目の回答結果 (Table1) について、設問1を除いて正答率が誤答率を上回っていることから、民生児童委員の認知がおおむね妥当であることが示されている

るといえよう。しかし、誤答者の人数は少なくなく設問 1、3、4、5、6、7、8、10 は 100 人以上が誤答、設問 2、9 についても 80 人が誤答していたことから、自殺に関する誤った評価の所在が示されているといえよう。

援助要請態度、信頼感、負債感の関連性について

本調査結果 (Table3) から、負債感は、肯定的援助要請態度および否定的援助要請態度の双方に相関を示したことから、被援助・援助要請により負債感が生成されることが示唆された。負債感、信頼感と正の相関を示し、さらに信頼感は援助要請の肯定的態度と正、否定的態度と負の有意な相関を示したことから、肯定的援助要請態度に伴う負債感是他者への信頼感を高め、否定的援助要請態度に伴う負債感是他者への信頼感を低めることが示唆されているといえよう。

以上から (仮説 1) 「負債感は援助要請態度及び他者信頼感と有意な関連性を有するであろう」については支持された。

信頼感、負債感、援助要請態度が自殺予防活動の認知評価に与える影響

以下では、ゲートキーパー活動に関する各設問の回答に影響を与えた要因について検討する。

設問 1. 「死にたい」と言っている人は、実際には死なない」について「死ぬ、死ぬと言う人は死なない」は、俗説であり自殺予防における最も大きな誤解である (松本, 2010)¹⁶⁾。

負債感、否定的援助要請態度が強い人ほど誤答選択への影響過程が示されている。この結果から、否定的援助要請態度に伴う負債感により生成された回避的な対人態度により被援助者に関する情報が少ないため誤まった評価がなされることが示唆されているといえよう。

設問 2. 自殺を考えている人は、「死にたい」と口に出してなくてもサインを出している」については、正答率は 90% を超えて正答率が高かった項目である。正答の選択には、信頼感が有意な影響を与えていた。信頼感の高さは、他者情報への接触の高さと関連していることから、被援助者についての理解を促進する要因であることを示唆しているといえよう。

設問 3. 「うつ病さえ治せば自殺は防げる」は、誤った認識であり自殺の原因と目されるうつ病は社会的状況からもたらされた反応型ないしは心因型の抑うつ状態とされるものであり、結果的にうつ状態になったものである (北村, 2011)¹⁷⁾。本設問についても、負債感と否定的援助要請態度の強さが誤答選に影響していることから、忌避対人態度によるステレオタイプな評価がなされたと考えられる。

設問 4. 「自殺について話をするとかえって自殺の危険性をたかめる」は、誤った認識であり反対にしっかり受け止めて傾聴することが必要である。この設問についても、負債感が高く、否定的援助要請態度が誤答選択に影響しており、援助に対する忌避的傾向によりステレオタイプ的な評価がなされたと考えられる。

設問 5. 「自殺者は男性より女性の方が多い」については、先述の通り男性は女性よりも多い (厚生労働省, 2020)¹⁾。この設問については、否定的援助要請態度のみが誤答選択に有意な影響を与えていた。この評価の背景には男性の方が女性に比べて援助要請態度が否定的である (Leong & Zachar, 1999)¹⁸⁾ ことや男性自殺者数は事前に相談しないことも多いことから自殺者数を少なく

見積もっている可能が予見される。

設問6. 「若者（15～39歳）の死因の1位は自殺である」については、事実である。厚生労働省（2020）¹⁾は0～39歳の各年代の死因の第1位は自殺となっており、男女別にみると、男性では10～44歳において死因順位の第1位が自殺となっており、女性でも15～29歳で死因の第1位が自殺と報告している。この設問については、他者信頼感の高さが正答率を高めており、高い信頼感による豊富な他者情報が妥当な評価の要因と考えられる。

設問7. 「うつ病や自殺は、私の役割とは関係ない」この設問は、ゲートキーパー活動の本質のみならず、民生児童委員としての活動を否定するものであり、誤った認識である。本設問についても、負債感と否定的援助要請態度の強さは誤答選択に影響しており、否定的援助要請態度に付随する負債感、他者に対する強い忌避的態度を生成していることが示唆されている結果といえよう。

設問8. 「死にたい」と口する人には「頑張れ」「命を粗末にするな」「逃げてはダメだ」「そのうちどうにかなるよ」などの声掛けをする」は、誤った認識である。松本（2015）によると、悩んでいる人は問題を抱えながらも、どのように解決したらよいかわからず、辛い状況に追い込まれてる。管理的・支配的な発言に過敏あることから一方的な叱咤激励や説得は、逆効果となる。この設問についても、負債感と否定的援助要請態度が誤答選択に影響により被援助者である自殺に傾く人の心理的特性を理解しないステレオタイプの評価がなされていると考えられる

設問9. 「死にたいと言っている人と出会ったら本人のプライバシーを尊重して自分一人に対応する」は、誤った認識である。悩んでいる人はさまざまな問題を抱えている場合もあり、一人の支援者ではすべてを解決できないこともある。関係する支援者同士が協力して支援をしていくことや専門家につなぐことが大切である（川野，2017）¹⁹⁾。本設問については、否定的援助要請態度が単独で有意な影響過程を与えていたことから、援助者として援助に困窮した際の援助要請について否定的な態度が反映された結果と解釈できよう。

設問10. 「自殺に対応できる専門機関や専門家はいない」は、誤った認識である。厚生労働省（平成29（2017））³⁾は、全ての国民が、身近にいるかもしれない自殺を考えている人のサインに早く気づき、精神科医等の専門家につなぐため対人支援・地域連携・社会制度のレベルごとの対策を連動させる取り組みを進めている。本設問についても負債感と否定的援助要請態度が誤答を選択する影響過程が示されていた。この結果は、否定的援助要請態度に付随する負債感による忌避的対人態度による影響と考えられる。

以上から、信頼感の高さが設問2、6、7、への正答選択への影響過程が認められたことから仮説2「信頼感の強い個人は、他者の視点を取得しやすいことから妥当な援助評価をすることが予測される。」については、支持されたといえよう。

また、設問1、3、4、7、8、10にて否定的援助要請態度を伴う負債感の影響が誤答選択に認められた結果から仮説3「否定的援助要請態度を伴う負債感、援助者についての理解や援助行動について忌避的評価をすることが予測される。」については支持されたといえよう。

ゲートキーパー活動は、社会全体で共有すべき重要な活動である。しかしながら、本調査でも明らかになったように、地域の援助者である民生児童委員においても十分な理解や援助活動への

適用がなされているとは言い難い。

また、自殺に傾く人に対する認知については、一般的信頼感が妥当な認知に影響を与え、援助要請態度を伴う負債感が妥当性を欠く認知に影響することが明らかにされた。しかしながら、肯定的援助要請態度を伴う信頼感の影響については有意な影響過程を見出すことはできなかった。今回援助要請態度の測定に用いた尺度は10項目であり、測定結果が援助授受の実態を反映しているとは言い難い。今後は、授受態度を包括して測定する尺度により、負債感等の関係を明らかにしつつ、一般的信頼感を媒介する他者認知の妥当性について検討する必要がある。

引用文献

- 1) 厚生労働省 (2020) 令和元年版自殺対策白書
- 2) 本橋豊 (2007) 自殺対策ハンドブック Q & A ぎょうせい
- 3) 厚生労働省平成 29 年 (2017) 自殺総合対策大綱～誰も自殺に追い込まれることのない社会の実現を目指して～
- 4) Allport, G.W. (1935) Attitudes. In C Murchison (ed), Handbook of social psychology Vol.2. Worcester, Mass : Clark University Press.
- 5) Rotter, J. (1980) a Interpersonal trust, trustworthiness, and gullibility. American Psychologist, 35, 1-7
- 6) Rotter, J. (1980) b Trust and gullibility. Psychology Today, 102, 35-42. 7) 菊地・渡邊・山岸 (1997) 菊地雅子・渡邊席子・山岸俊男 他者の信頼性判断の正確さと一般的信頼 実験研究 実験社会心理学研究, 37, 23-36.
- 8) 一言英文・新谷優・松見淳子 (2008) 自己の利益と他者のコスト 感情心理学研究, 16, 3-24
- 9) Gouldner, A.W (1960) The norm of reciprocity: A preliminary statement. American Sociological Review, 25, 161-178.
- 10) Watkins, P.C., Scheer, J., Ovnicek, M., & Kolts, R.D. (2006). Indebtedness of gratitude: Dissociating gratitude and indebtedness. Cognition and Emotion, 20, 217-241
- 11) 内閣府 (2013) 「ゲートキーパー養成研修用テキスト (第3版)」 Pp140-148 9. ゲートキーパー Q&A
- 12) 小杉素子・山岸俊男 (1998) 一般的信頼と信頼性判断 心理学研究, 69, (5) 349-357
- 13) 相川充・吉森護 (1995) 心理的負債感尺度の作成の試み 社会心理学研究, 11, 63-72.
- 14) 太田仁・阿部晋吾 (2011) 叱られ経験が援助要請態度に及ぼす影響 (1): 援助要請態度尺度の構造の検討 社会心理学会第 52 回大会 発表論文集
- 15) 全国民生児童委員連合会 (最終閲覧日: 2020 年 9 月 17 日) https://www2.shakyo.or.jp/zenminjiren/minsei_zidou_summary/
- 16) 松本俊彦 (2015) もしも「死にたい」と言われたら 自殺リスクの評価と対 中外医学社
- 17) 北村俊則 (2011) 自殺の対人関係理論 - 予防・治療の実践マニュアル - 日本評論社
- 18) Leong, F.T.L. & Zachar, P. (1999). Gender and opinions about mental illness as predictors of attitudes toward seeking professional psychological help. British Journal of Guidance and Counselling, 27, 123-132.
- 19) 川野健治 (2017) 自殺予防教育プログラム GRIP の開発. 心と社会; 48 (1)

参考文献

- 1) 山岸俊男 (1998) 信頼の構造と社会の進化ゲーム 東京大学出版会
- 2) 太田仁 (2005) たすけを求める心と行動 - 援助要請の心理学 - 金子書房

Abstract

The study was conducted with 4,217 Welfare volunteers and Child Welfare volunteers as the targets with the purpose of contributing to adaptive help in suicide prevention by clarifying the factors that influence understanding and help of people who are inclined to commit suicide.

Specifically, the test of following three hypotheses was attempted to examine the influence on people's evaluation of suicide prevention help by general trust (hereinafter trust), indebtedness in receiving help (hereinafter indebtedness), and help-seeking attitude.

Hypothesis 1. People will feel indebtedness regardless of a positive or negative help-seeking attitude. Hypothesis 2. It is predicted that people who have high trust will make an appropriate evaluation of suicide prevention help because it is easier for them to obtain information from others. Hypothesis 3. People who feel indebtedness linked with a negative help-seeking attitude assume an evasive attitude to others; therefore, they do not have enough information from them. Consequently, it is predicted that they will make an evaluation which lacks appropriateness.

The results of the analysis of 1,174 people who had no deficiencies in their responses supported all hypotheses. As a future task, although the correlation analysis indirectly suggested that the indebtedness linked to the positive help-seeking attitude enhances the trust, the influence process on the appropriate evaluation of suicide prevention help was not clarified. The reason may be that the measurement of help attitude was not structurally implemented. In the future, it will be necessary to carry out the examination by assuming the model of influences process on receivers of help via indebtedness in consideration of multifaceted nature of help-seeking attitude.

Keywords: Suicide prevention, gatekeeper, help-seeking attitude, indebtedness, suicide prevention help evaluation